

(30~39cm、300~700g) 400尾を標識(9×11mm赤色セルロイド板ビニールチューブ製、尾柄結着)放流、同年10月26日まで23尾再捕、40~121日経過して大室出で9尾(びし釣、底魚1本釣)、大島千波岬沖で1尾、52日経過後(びし釣)、城ヶ島沖で6尾、50~61日経て(はね釣)、洲ノ崎沖で4尾、44~56日経て(はね釣)、外房州沖で2尾、26~44日経て(はね釣)、青森八戸鮫角沖NE/N22度で1尾、9月6日106日経て(千葉県天津亀栄丸1本釣)、おのおの再捕された。伊豆島まわり漁場のマサバが青森県沖まで北上回遊を確認したことは水産資源学上特記すべき成果である。

6. 日本海水産資源の動向

宇田道隆 (東京水大)

昭和38年度日本海ブロック会議が11月2~4日、日水研で開催された。その討議の概要が日本海区水産試験研究連絡ニュース第151号(1963.12)に掲載されているのを抄録する。

- (1) 今年度海況 冬春日本海西部異常低温で各種魚類のへい死・仮死をみたに反し、同海北部では水温平年並か多少低目に経過、その後幾分回復したものの日本海全域極めて低目。
- (2) マサバ (日本海) 1959年以降組成急変、高令魚減少著しい。サバ漁場特に越冬場北偏。近年若令群の出現状況からマサバ資源今後増加の傾向にある。
- (3) マアジ 1953年ごろから爆発的に出現した豆アジは近年減増

傾向にあり、一方体長15～20 cmの中アジ主要ウエイトを占め、前者は九州海域からの補給群、後者は日本海地付群と考えられる。したがって九州方面からの補給減少は資源的に楽観を許さない。

- (4) マイウシ 漁況の歴史的変化に極長期の脈動があり、現在はその不漁期にある。さらにその脈動中に小脈動があり、現在はその方でも不漁期に当る。その変動時には魚類の集団への死など環境激変の場合が多い。昨今の漁況や能登近海の稚仔発生量などから今後資源的には低位でも増加に向いと推定。
- (5) スルメイカ 今年沖合（大和堆付近）漁況昨年にくらべて悪く、補給量少なかつたことが原因？主漁場は前線帯特に同堆周辺冷水域張出しの南および東側に形成と推定。
- (6) サンマ 今年的好漁場は能登沖に形成され、漁期多少おくれ、漁況昨年に比し若干おとり、好漁場と暖流々路は深い関連がある。過去にあまり出現しなかつた中型群（体長27～28 cm）が主体、秋季発生群。サンマの企業性については漁獲密度から問題が多い。
- (7) ブリ 北部海域の冬ブリでは当才魚（フクラギ）は例年より少ないが大ブリは海況から、また中小ブリは資源面から好漁期待。
- (8) スケトウダラ （春季）沖合調査では魚群薄く漁獲率悪いので現況では企業性薄いと報告。魚探反応映像につき魚種、量に質疑あり。
- (9) 底魚 統計面からの現況と、その意味する撰択性資源面など討議、撰択性の問題が大きいことが主張された。漁業者の要望は機械化と漁場開発の問題が多い。